



Title	第二部 部局史 . 歯学研究科・歯学部
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 649-680
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28179
Type	bulletin (article)
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_649.pdf



[Instructions for use](#)

齒学研究科・齒学部

序章 歯学部創設まで（一九二七～六六年）

北海道大学に歯学部が創設されるにあたっては、多くの先人達の努力があつた。一九二七年、北大医学部附属医院（一九二二年設置）第一外科に歯科が開設された。一九三五年、学生生徒健康相談所（現保健管理センター）に歯科診療室が開設された。一九五二年、北海道歯科医師会で道立札幌医科大学に歯学部設置を要望するという決議がされ、札幌医科大学歯学部設置期成会が結成された。一九五三年、道議会で歯科医育成機関設置促進の議決が行われ、札幌医大に歯学部を設置する方向で調査したが、一九五六年、道の財政では不可能との結論に達した。

一九六四年、道歯科医師会、道議会、北海道大学および北大医学部等が中心となり、関係諸団体の協力を得て、北海道大学歯学部設置期成会が発足した。一九六五年、道議会で「北海道大学歯学部設置に関する要望意見書」が可決され、北大では文部省に、一九六六年度に歯学部が設置されるべく概算要求が行われた。また、歯学部設置準備委員会が設立された。しかし一九六六年度は見送られ、翌一九六七年二月に設置予算が認められ、大学設置審議会で設置が認可された。三月に期成会は解散し、新たに北大歯学部整備促進後援会を発足し、職員住宅や研究用機器の準備が開始された。

第一章 学部創設期（一九六七～七六年）

わが国の戦後復興はめざましく、著しい経済成長の中、国民の砂糖消費量が増加した。これに追隨するように齶蝕が増加した。また、一九六一年の国民皆保険制度の導入が歯科受診患者数の急増をもたらし、歯科医師不足が大きな社会問題となっていた。このような社会的背景の下に、一九六七年に北海道大学に歯学部が新設された。札幌市民等からの大きな期待と前述のごとく北海道歯科医師会ならびに道議会からの強い支援もあった。六月一日付で、歯科保存学第一、歯科補綴学第一、口腔外科学の三講座が置かれた。学生定員は四〇名であった。六月十、十一日の両日に歯学進学課程入学者選抜試験が実施され、入学式が六月三十日に行われた。入学者は三八名であった。七月一日から教養部において、歯学進学課程の講義が夏休みを返上して行われた。一九六九年四月には、一期生の三七名が歯学部に進学し、専門課程の授業が始まった。この頃から、大学内は学園紛争のため騒然となってきたが、歯学部では学生教育の準備に忙しく、授業も比較的平穩に行われていた。しかし、教養部にいた二期生は五月から十一月まで、入学間もない三期生は五月から翌年一月まで授業が行われなかった。平静さを取り戻した一月中旬から三期生の授業が再開された。一九七一年十月からは臨床実習が始まった。この間、一九七一年度までに全一五講座が順次設置された。庁舎は、創設当初、一三条通り（銀杏並木）の南側の木造二階建ての旧医学部校舎を使用していた。その後、一三条通りをはさんで北側に、学部部分が六階建て、病院部分が二階建ての新庁舎が完成した（一九七〇年十一月三十日）。一九七三年三月、第一期生として三二名が卒業した。一期生の卒業時期には、間に合わなかったが、翌一九七四年四月一日付で、大学院歯学研究科が設置された。定員は三〇名、修了時には歯学博士号が授与されることとなった。

学部教育のカリキュラムは、設置申請時に作られたものに従って実施されたが、運用に伴い、改正の必要が生じ、一九七一年頃から、教務委員会を中心にカリキュラムの検討が始まった。基本構想は、基礎的な知識の上に臨床的な知識を積み重ねるといった教育方法をとることであった。このために、一年一年を単位に積み重ねる学年制とした。また、土曜日は原則として自習日とし、図書室あるいは自宅で自由に勉強させたいというカリキュラムに改正された（一九七三年三月二十日）。

研究施設は、個々の講座が単独で小型の機器を購入するよりは、大型機器を共同購入し、共同して研究すべきとの考えで、創設当初から共同研究室が作られた。その後、中央研究部として、歯学部整備促進後援会から寄贈された大型機器等を設置し、学部内で人員を工面して、主任（助教授）と技官を配置して運営した。研究交流の場として、学術委員会のもとに歯学談話会が定期的で開催された。旧木造建物内にも実験動物飼育室が作られていたが、一九七二年十二月に本館屋上階に一六四平方メートルの施設が完成した。実験動物利用者会議および常任委員会が置かれ、一九七四年七月に実験動物室使用基準が制定され、運営された。一方、国際交流の面では、一九七三年八月二十日に、オレゴン州立大学（後に「オレゴンヘルスサイエンス大学」と改称）歯学部との姉妹校提携が結ばれ、研究者の相互交流が始まった。

地域社会への貢献の一端として、一九六九年度から一九七四年度までの六年間にわたって、北海道教育厅と連絡をとり、歯科診療台を備えた特殊自動車えるむ号で、僻地学校児童生徒の歯科検診、歯科保健指導および歯科治療を実施した。当時、一番の社会的ニーズであった歯科医師の養成と附属病院の活動はもとより、この巡回診療は北大歯学部と地域社会との強い結び付きを物語るものであった。

この創設期の一〇年間に、北海道大学歯学部における教育および研究の体制、学術交流、さらには、地域社会との連携など、基礎作りが着実に進んだ。

第二章 学部充実期（一九七七～八七年）

第一節 新たなる一歩に向けて

一 創立一〇周年記念式典

一九七七年八月一日に附属病院、九月十七日に歯学部・附属病院創立一〇周年記念行事が執り行われた。本記念事業の一つとして『北海道大学歯学部十周年記念誌』が発行され、本歯学部が地域社会に歯科医師を送りだす教育機関として、また歯学研究、卒後教育の中心的な役割りを担っていることを確認すると共に、さらなる発展を誓い合った。

二 歯学研究科第一回修了式

一九七四年四月、大学院歯学研究科に入学した一期生七名の内、六名が一九七八年三月課程を修了し、歯学博士の学位を授与された。その後、歯学研究科の入学者ならびに学位取得者は一九八五年までは毎年一〇名前後であったが、一九八六年以降は二桁台となった。

三 オレゴンヘルスサイエンス大学と姉妹校提携一〇周年記念式典

一九七三年以来、多くの研究者および学生の交換を行って歯学教育、口腔科学の進展ならびに大学の国際化に貢献してきた。この姉妹校提携一〇周年を記念して、一九八三年六月にはオレゴン州ポートランド、一九八四年六月

には札幌で、それぞれ両大学のキャンパスで姉妹校提携一〇周年記念祝賀会が盛大に執り行われた。両大学の学部長、札幌市長、ポートランド市長をはじめ多くの大学関係者の出席の下、両大学の交流が実り豊かなものになることを念願するとともに、両大学の益々の発展を祈念した。なお、この記念式典の記録は、『北海道大学歯学部 オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部 姉妹校提携十周年記念誌』として一九八五年三月発刊した。

第二節 充実に向けて

一 学生定員増

一九七七年四月、歯科医師数が不足しているという社会の要望から、歯学部学生定員は四〇名から八〇名に増員された。一九七九年四月、第一一回歯学部進学式で七六名の歯学部学生を受け入れ、八〇名体制の教育がスタートした。一方、一九七七年四月には歯科放射線学講座、一九七八年には小児歯科学講座、一九八一年には特殊歯科治療部、一九八六年度には歯科麻酔科の増設が認められ、研究および教育体制はより一層充実した。

二 増、新築工事

歯学部学生定員が四〇名から八〇名に増員されたことに伴い、一九七八年四月から教育、研究棟の増設工事が始まった。一九七九年二月にはA棟、B棟六一一平方メートルからなる講堂、講義室、実習室および教官研究室等が完成した。白色の明るい建築で、一三条通りに面していた学部玄関も中央道路に面するものとなった。さらに一九八二年には特殊歯科治療部の設置に伴って、C棟、D棟一八二九平方メートルからなる臨床研究棟、附属病院棟が完成した。教育、研究施設は一段と充実したが、研究活動の活発化に伴い、動物飼育室の不足が生じ、一九八六

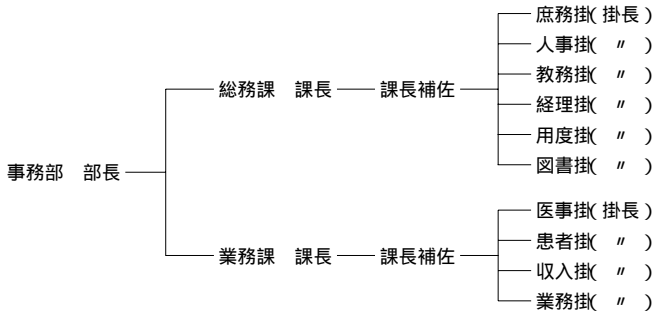


図 1 歯学部および同附属病院の事務組織図

年三月には、さらに動物飼育室四九平方メートルの増築工事が完成した。一方、一九七〇年に建てられたC棟の建物は、外壁が特殊処理鉄板を用いていたので、錆び色を基調としていたため、不調和が感じられるようになった。そのため一九八三、一九八四両年度にかけてこれも白色に塗りかえられ、調和のとれた外観となった。

三 歯学部および附属病院事務一元化

歯学部および同附属病院の事務組織は、歯学部開設以来、学部事務と病院事務が設けられ、それぞれ管理運営がなされてきた。しかしながら、教育、研究ならびに診療業務を円滑にするため、また事務処理の簡素化、合理化の為に、一九八三年四月より図1に示すような歯学部および同附属病院の事務組織が一元化された。この事務一元化は北海道大学で初めて取り入れられたものであった。

四 研究の潮流この一〇年

一九七八年三月、第一回学位取得者六名の誕生を契機にして、歯学談話会という名称で行われていた従来の学術研究会は一九七九年七月、北海道歯学会へと発展した。この学会には学内教官研究者のみならず、道内の他大学の関係者ならびに一般の歯科医師も参加した。本学部における研究領域と、研

究テーマは硬組織の構造分析、石灰化機構の解析、エナメル質の形成機構、破骨細胞と骨吸収、ヘルペスウイルスと口内炎、*P. gingivitis* をめぐる歯周疾患の発症機構と治療法、実験モデル動物による炎症反応の解析、顎嚢胞の生育機構、顎関節症とその治療法、総義歯と顎運動、発声と脳、エネルギー産生と Na^+ K^+ ATPase の反応分子機構、唾液腺の形態学的観察と唾液の分泌機構、口腔悪性腫瘍の発症機構とその治療法、コンピュータの矯正データ解析による歯科矯正、新しい歯科材料の開発など多岐にわたった。その間、研究業績も世界的レベルに成長した。すなわち、一九七七年度の論文および著書は六一編で、そのうち欧文が五編と少なかったにもかかわらず、五年後の一九八二年度は九六編のうち二六編が、一〇年後の一九八七年度には一四七編のうち三八編が欧文で占めるようになった。その結果、一九八七年度の科学研究費受給数も三六となり、一九七七年度に比して三倍と著増した。また一年間に数名程度であった海外渡航者も一九八三年度には一四名となり、研究成果を広く海外で発表できるようになると共に、国内外の研究者と共同研究できる体制ができた。このように充実した教育、研究の成果は中国、台湾、韓国、バングラデシュ、フィリピン、ブラジル、アルゼンチンなど十カ国の留学生を受け入れる基盤となり、歯学研究の国際貢献へと結びついた。なお、大学院生として初めて外国人学生を迎えることができたのは一九八〇年である。従って、歯学部の一〇年の研究実績は、急速な医学研究の発展、新しい研究や治療機器の開発、分子生物学や脳科学の進歩等により遅れることなく、世界一流の歯学部を作ろうとするスローガン実現への礎となった。

第三章 学部改革期（一九八八～二〇〇一年）

第一節 新しい世界に向けて

一 創立二〇周年記念行事

一九八七年に満二〇年を経過した。九月十九日には姉妹校であるオレゴンヘルスサイエンス大学をはじめ、関係諸機関ならびに大学内外から多数の御来賓御臨席のもとに、創立二〇周年の記念式典が挙行され、引き続き記念行事が行われた。これを記念して、同窓会より、歯学部玄関前に学部名の入った石標が寄贈された。なお、創立二〇周年記念誌も発行された。

二 創立三〇周年記念行事

一九九七年には、満三〇年を経過し盛大に記念行事が行われた。九月十三日に、北海道大学歯学部・附属病院創立三〇周年記念シンポジウム・講演会が北海道大学学術交流会館において開催された。シンポジウム終了後、別会場において（会場をポールスター札幌に移し）、記念式典と祝賀会が盛大に行われた。併せて、講堂脇に記念植樹が行われた。なお、創立三〇周年記念誌も発行された。

三 国際交流の拡充

全北大学校歯科大学との姉妹校提携 北海道大学歯学部と大韓民国全北大学校歯科大学とは、一九九〇年十一月二

十二日に、姉妹校提携の協定書を取り交わした。その後、北海道大学歯学部キャンパスにおいて姉妹校提携五周年記念行事を行うことになり、協定書の調印、学術講演会が一九九五年十月十二、十三日に行われ、また一九九六年十月二十八、二十九日には全北大学校歯科大学キャンパスにおいて、式典・学術講演などの交流が行われた。二〇〇〇年十月には姉妹校提携一〇周年記念行事が計画されている。この間、全北大学校歯科大学教官の北海道大学歯学部への留学、北海道大学歯学部とオレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校提携記念行事に全北大学校歯科大学からの代表団が参加して共に祝う等、活発な交流が行われている。

オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校交流　オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校提携一〇周年および一五周年には北海道大学歯学部と米国オレゴン州ポートランドのオレゴンヘルスサイエンス大学歯学部キャンパスとを相互に訪問して記念行事と学術交流を行ってきた。一九九三年九月と一九九四年十月には、姉妹校提携二〇周年記念行事が、それぞれ札幌キャンパス、ポートランドキャンパスを相互訪問し、多数の参加を得て盛大に行われた。姉妹校提携二五周年は一九九八年であったが、翌一九九九年がオレゴンヘルスサイエンス大学の開学一〇〇年にあたり盛大な記念行事が予定されていたため、姉妹校提携記念行事もこれに併せて行うこととし、一九九九年九月二十八日に訪問団がポートランド市を訪れた。記念学術講演会、記念行事を行い、十月一日には開学一〇〇年記念式典に出席して共に祝った。両校の間の人的交流も活発に行われており、学術交流を軸とした親善関係はますます発展しつつある。

ハルビン医科大学口腔医学院との姉妹校提携　北海道大学歯学部の三校目の姉妹校として二〇〇〇年六月五日に、中華人民共和国ハルビン市のハルビン医科大学口腔医学院と姉妹校提携を行った。ハルビン医科大学口腔医学院歯学部(相当)は四一年の歴史を持ち、一九九九年八月十六日に同国の一番目の口腔医学院として従来の第一臨床医学院(歯科)から独立して発足した。その前後から北海道大学歯学部と同口腔医学院との姉妹校提携の気運が高

まり、一九九九年八月に北大歯学部代表団が同口腔医学院を訪問、その後話し合いを重ねて姉妹校提携に合意し、学術交流調印を行った。

四 新しい教育体系の構築のために

一九九一年七月の文部省による大学設置基準の大綱化、すなわち一般教育と専門教育の区分の廃止に端を発し、大学における教育体制が大幅に変更されることになり、本学でも一九九五年四月から学部一貫教育体制がスタートした。歯学部では一九九一年に新たに設置されたカリキュラム委員会において、カリキュラムの見直し作業が行われ、後述するように、多くの新しいカリキュラムを導入、逐次実施した。

五 歯学部学生の変化

学生定員の適正化 北大歯学部の学生定員は、学部開設時まず四〇名で出発し、一九七七年には八〇名に増員された。しかしその後、歯科医師の供給過剰が社会問題化し、一九八九年には二〇名の定員減で六〇名となり現在に至っている。

女子学生の増加 歯学部だけの現象ではないが、女子学生の占める割合が増加しつつある。年度によってその数は異なるが、全体の約三分の一であり、他大学の動向からしてもこの傾向は今後とも続いていくものと思われる。このような状況を踏まえて、手狭になってきた女子学生控室を広くするなどの整備が行われてきた。

第二節 一貫教育の導入と教養部の廃止

学生定員の六〇名への減員に続いて、教養部の廃止に伴う学部一貫教育の導入が全学的に実施された。これに伴って、歯学部 of 教育施設とカリキュラムの全面的な見直しが行われた。

一 教育施設の統廃合

従来、講義施設としては、講堂・第一～第三講義室の四室があり、学部学生（三～六年次）の座学で使用されていた。新カリキュラムでは、二年次前期から授業が行われることになったので、教室を準備する必要が生じた。

そこで、教育設備と方法の改善により利用されなくなっていた保存、補綴、口腔外科各系の示説室とテレビ室を、各講座の理解を得て、講義室、学生自習室、控室、ゼミナール室等へ改修した。さらに学生定員減に伴う学生技工室の縮小ならびに男子学生ロツカー室の縮小を行い、学生控室および女子学生ロツカー室へそれぞれ改修した。この結果、講義室二室、ゼミナール室二室が新設され、講義室、ロツカー室、控室等学生用区画も、学生数、男女比、新カリキュラムに対応したものとなった。

二 図書館の改革

図書館の拡張 教育カリキュラムの改変と、学部内、病院内の上履き廃止に伴って下駄箱を撤去し、その結果生じたスペースに書庫を増設し保管庫とした。余裕の出来た図書館内には書架を増設した。

利用環境の整備 利用者の便宜のため、平日の利用時間を九時から二〇時に、また、土曜日は一〇時から一七時とした。超過開館時間の図書事務要員としてパートを雇用した。入退室管理設備を設置し、図書館の入り口に監視装

置を設置した。中央図書館のデータベース化に伴い、その端末が設置され図書検索システムが整備された。大学院生には必ず習熟するよう教育している。

第二節 新しいカリキュラムの導入

一九九五年入学の新生から、学部一貫教育が導入され、学部が学生生活全般について指導するように教育体制が変更された。従来、歯学部は六年間が二年間の歯学進学課程、四年間の専門課程であったために、歯学部は専門課程四年間のみの教育に携わってきた。しかし、学部一貫教育により、歯学部は六年間のカリキュラムすべてに関与することとなった。

歯学部は、学部における教育の基本理念を、歯科医療における量的および質的变化に柔軟に対応していける能力の涵養、および歯科医師としての優れた人格の育成、の二点に位置づけた。その結果、六年間を三期に分け、初めの一年半を基礎教育期、次の二年半を専門教育期、最後の二年間を総合教育期として区分した。基礎教育期においては高校教育からのスムーズな移行と歯学に対するモチベーションに主眼をおき、入学直後に行う宿泊研修、一年次学生を対象とした歯科学概論の新設と早期臨床体験実習の導入、二年次前期学生を対象とした専門科目への橋渡しをする専門基礎科目の新設等を行った。また、専門教育期においては、専門教育の充実と効率化を図ることを目的として、基本技術実習の新設、臨床科目における基礎実習（ファントム実習）の統合化を行うとともに、人として、また歯科医師としての人間教育を充実させることを目的として、二年次後期から四年次後期の学生を対象とした全人教育演習を新設した。さらに総合教育期においては、総合的判断能力の育成を目的として、一つのテーマを決め、これについて全学生が、種々の観点から勉強し、討議を行う統合講義、基礎科目を臨床の視点から講義す

る臨床講義および応用的問題解決能力を養うのに役立てる研究実習を新設した。また、大学院については、大学院重点化を視野に入れながら、複数専攻制の導入や入学者選抜方法の見直しを行った。

一 新入生宿泊研修

新入生を対象とし、実施時期は一九九六年までは六月に学部一年生（三年生）を対象に、一九九五年からは新入生を対象に、四月の入学式後一週以内の週末に一泊二日の宿泊研修が行われている。研修場所は真狩村（道新青少年の家）、大滝村（北海道国立大学セミナーハウス）、日高町（国立日高青少年の家）と変更された。研修内容は、オリエンテーションでカリキュラムの説明、北海道大学の学生として・歯学部学生として必要な事項、クラブ活動および親睦等である。学部長、病院長、クラス担任、副担任、教務委員会委員長、同委員、学生委員会委員長、同委員、女性教官代表、事務部長、薬剤部長、看護部長、教務掛長等が参加するほか、主として四年生の有志多数が参加し、新入生を含め総勢九〇名弱で実施されている。

二 早期臨床体験実習 Early Clinical Exposure

一九九五年から開始された一年次を対象とした新規の実習である。九月に三日間連続して行う。学外の診療施設（歯科医院、病院歯科等）での見学を中心にした実習で、学生数は各施設二名。実習終了後、学生のレポート提出派遣先からの報告書等をまとめ、検討会を行っている。

三 歯学概論

歯科医療に限らず広い視野で歯科医師として必要な意識・知識、そのための学生のモチベーションを高めるため

の科目である。歯科医療と直接結びつかない領域をも多く含めた内容を題材に教授全員で講義をする。

四 専門基礎科目の新設

二年次前期という早期に専門的な知識に触れさせ、専門分野への意識を高め、学部一貫教育としての専門教育を充実させるために新設された科目で、歯学部が講義する。基礎形態学、基礎組織学（発生学）、基礎生理薬理学、分子生物学および生物物理学がある。

五 リメディアル（補習）教育

高校での未修得理科の科目（物理、化学、生物）についての知識を向上させ、専門教育に支障なく移行出来るように配慮した教育である。一九九九年までには、このような趣旨により歯学部一年前期に基礎自然科学（物理、化学、生物）を開講し、それぞれを歯学部教官が担当していた。二〇〇〇年度から全学教育のカリキュラムに組み込まれ、入学試験（センター試験および本学第二次試験）で選択しなかった者（特別選抜では高等学校で履修しなかった者）に限り、それらの科目のうち物理、生物を履修できるリメディアル教育が行われている。

六 臨床基礎実習の統合化

一九九七年度より開始された。従来、臨床科目の実習（いわゆるファントム実習）は各臨床科目で個別に行っていたが、保存系、補綴系、矯正、小児歯科各講座から実習指導担当教官グループを構成して実習指導にあたる体制に改正した。担当は二年間とし、順次教官編成を変える。これにより学生は同じ教官から種々の科目について指導を受けることができることとなった。また、教官は専門外を学べる利点がある。

七 全人教育演習（二年次後期～四年次後期）

専門教育の中に、全人的な教育の場が求められ、学生が教育を受ける教官と少人数で個人的に接する機会を持つべきであるという理念で、一九九六年度から設けられた科目である。対象は二、三、四年生で、期間は二年次後期～四年次後期である。金曜の四講目に、平均六名（二、三、四学年各二名）の学生がグループになり、それぞれ教授、助教授、看護部長、薬剤部長のもとで、対面教育を受ける。

八 研究実習

一九九九年後期から開始された新規の実習である。学生が少人数のグループで各講座に配属され、研究を行う。配属先は学生が選択する。開講期間は五年次九月～六年次七月であり五年次後期九～十二月は月曜三・四時限、一月～三月は月・金曜の三・四時限、六年次前期は月・金曜の三・四時限である。評価は、出席、研究発表（六月下旬）、研究成果報告書の提出（七月上旬）を以て行う。初年度は、基礎講座のみが平均六名の学生を受け入れて実施した。

九 臨床実習期間の延長と一般医学（関連医学等）の実施時期

従来、五年生後期中から一年間、月曜から金曜まで実施していた臨床実習を、新カリキュラムでは火曜から木曜までの週三日間、五年生前期から六年生後期中まで実習期間を延長することにした。月・金曜は総合教育として充実させている。従来、臨床実習に入る前に実施していた一般医学（関連医学等）をこの期間に集中し、臨床実習との関連性を密にさせ、臨床教育の統合と充実化を図った。

一〇 総合講義の定着

従来、科目別の講義により学んだ知識を、臨床実習と平行して疾患別あるいは主題別に各専門教科担当者が共同で効率的な学生参加型授業を行うことにより、臨床教育の統合と充実化を図った。

第四節 情報処理教育の強化

ほぼ二〇年前にいわゆるパーソナルコンピュータが教育、研究の場に導入され始めて以来、現在では大学院ではもちろん、学部段階でも情報処理に関する能力は学生にとって必須のものとなっている。同時に、HINES（ハインス・北海道大学情報ネットワークシステム）に代表されるコンピュータによる情報伝達に関するネットワーク（設備と体制）の整備が急速に行われた。歯学部においてもこれに関する整備が責務となっている。しかしながら、これら情報ネットワークに関するあらゆる設備体制は、従来の歯学部における研究・教育・診療各体系および設備の中に全く存在しなかったものである。従って、ネットワークへの接続、歯学部内設備の維持管理、さらに定期的なシステムの更新と監視、整備、管理に必要な経済的、人的、物質的手当の整備がほとんどできていないのが現状である。歯学部情報ネットワーク委員会が前述の繁多な職務を統括しているが、実際に業務を行っているのは実務能力のある助手等を中心とするボランティア教官であり、経済的にはネットワーク管理の予算が立てられていない。一九九九年度に、歯学部情報ネットワーク管理室が、狭いながらも確保されたことが唯一の進歩であり、現在室内の環境整備に力を尽くしている。

一 HINESの充実と歯学部ネットワーク構築

一九九二年に、北海道大学キャンパスにHINESが設置され、歯学部もその一支線として接続されることとなり、種々の設備が設置された。同時に、この学部内のケーブルとこれへのパソコンの接続を維持管理するための委員会が設置された。実際の業務は、ボランティアの若手教官にゆだねられている。

二 情報処理教育センター（現情報メディア教育研究総合センター）端末の設置と拡充

情報処理教育は、歯学部は早くから重視してきた科目であった。一般教育科目として情報処理（旧称）を必須科目としており、また、専門課程では歯科統計学として情報処理教育研究総合センターで実習を実施してきた。一九八九年より同センターの端末が二台歯学部配置された。専用の実習室が確保できないため、中央研究部の研究室の片隅に仮設置した。学生の利用率が急増したのは、一九九四年度に六台が配置になって以来である。これはこの間にパソコン、OS、ネットワークそれぞれに格段の進歩があつて、パソコンの操作性と機能が向上したこともあるが、このときから二階と六階の学生実習室に設置したことが稼働率の上昇に貢献していると考えられる。二〇〇〇年度より、端末が三五台になり、学生の利用がさらに増加している。

第五節 中央研究部の改組

中央研究部は、歯学部設立時からある組織である。当初は、助教授一、助手二、技官五（教務職員含む。）という構成であったが、二〇年後の一九九〇年には、技官一、教務職員二という構成となっていた。一九九七年に、教室事務官ならびに技術系職員の配置転換に伴い、中央研究部には教官、職員の配置はなくなった。これに伴って、

中央研究部の再編成と予算配分、提供業務の限定を行った。サービス部門の限定に伴って空いたスペースは、今後大学院研究室と将来の機器増加に備えることになっている。

一 四部門化

研究内容の変化、すなわち共用すべき研究機器の変化ならびに職員の配置転換により、一九九七年から、中央研究部（中研と略称）を中央電顕室、R研究部門、画像処理研究部門および遺伝子実験部門に限定した。また、各部門に管理講座を設定し、これら管理講座の長と中研部長、ならびに利用者代表教授三名によって、中研運営委員会を構成して中研の運営を行うことに変更した。

二 定員削減と職員配置、予算編成

前述のように、定員削減とこれに伴う職員の配置転換が行われ、中研構成部門の再編成を行った。同時に、従来各講座の拠出分と設備維持費によつて構成されていた中研予算を、一九九八年より、通常配分される設備維持費のみの配分とした。このために、各研究部門において、利用者負担区分を明確にし、消耗品等の提供を部門においては行わないこととして、中研全体の経費を圧縮している。

第六節 新しい歯科医師像を目指して

一 全国区大学であるために

北大は全国から幅広く学生が集まる大学である。歯学部でもその傾向は明瞭であり、北大歯学部を魅力のある歯

学部にし、優秀な学生を集めるといふ点からも重要である。このような特色を維持するために、過去一〇年間に様々な工夫を行ってきた。

広報誌『ぐんぐん』の発行 「大学・学部の外部への情報発信」という時代の潮流に従って、一九九四年に初めて高校生対象の学部広報誌を発行した。学生生活、大学院の生活などが多色刷りで見やすく解説されており、第一号のタイトルは伸びゆく歯学部を象徴して『ぐんぐん』とされた。毎年、およそ三五〇部が全国の高校に送られるほか、入試説明会やオープンユニバーシティなどにおいて活用されている。ほぼ二年ごとに改訂されており、一九九九年からは『ぐんぐん』という名称をやめて新しいデザインに変え、より魅力のある広報誌を目指した。

オープンユニバーシティ・体験入学の実施 少子化による大学入学者数の減少は大学が入試によって高校生を選抜する時代から、高校生によって大学が選ばれる時代へと変化しつつある。一九九八年より、北大で一斉に高校生に対して大学説明会を行うこととなり、歯学部においても高校生が来訪し、説明会と附属病院および電子顕微鏡の見学を行った。翌一九九九年にも同様の企画がなされて、参加者も増加した。二〇〇〇年からは更に規模を拡大して、八月上旬に全学一斉に体験入学とオープンユニバーシティを行うこととなった。オープンユニバーシティは、北大歯学部受験予定者の父兄、教師を含む一般市民に、歯学および歯科医療について、また北大歯学部について広く知ってもらうことを目的として行われる。体験入学は、歯学を志し意欲がある目的意識の高い優秀な高校生に北大の歯学部を志望してもらうことを目的として、実際に歯学部に触れてもらうために行われる。また一九九九年に特別選抜として採用した推薦入学が、二〇〇〇年からAO入試に移行することを受けて、道内三力所で行われる入試説明会にも歯学部は参加している。

二 入試方法の改善

入学試験の方法は、共通一次試験、入試センター試験の採用と二次試験の複雑な関係、および時代とともに変化する受験体制とに影響されて様々な変更がなされてきた。

理科の二科目選択制の導入 北大歯学部の入学試験において、従来、試験科目のうち理科は物理が必須であった。しかし、物理の必須の必要性について論議があり、一九八五年より、物理、化学、生物のうち二科目の選択制に変更された。

後期試験導入、分離分割方式採用 受験生に二度の機会を与えるように入試制度が変更されて、北大は一九九〇年度から分離分割方式を採用した。歯学部も定員六〇名を、前期試験定員五二名、後期試験定員八名に分割して募集・選抜を行い、前期ではセンター試験の成績と二次試験の成績で判定し、後期ではセンター試験の成績に、小論文と面接を加えて判定している。小論文・面接試験の実施にはかなりの労力を要するが、受験生の目的意識、意欲、性格など学力以外についてもある程度評価できる点に注目している。その後検討を続けた結果、入学後の成績には前期と後期とで特に差がないことが明らかになり、一九九八年度からは後期試験定員を一五名に増員し、前期定員を四五名とした。

推薦入学選抜の導入 従来の入試制度では、センター試験あるいは模擬試験での成績をもとに、はっきりした目的意識を持たずに、歯学部を志望する学生が多く、入学後の勉学の意欲が低下したり、中途退学者発生の原因となっていた。そこで歯学を志し口腔保健医療を通して社会に貢献する強い意志を持った人材を歯学部の子生として選抜することを目的として、二〇〇〇年度の入学者選抜において推薦入学試験を導入した。募集人員は入学定員六〇名のうち一〇名とし、大学入試センター試験及び第二次入学試験は課さず、書類審査による第一次選考と小論文と面接による第二次選考によって合格者を決定し、一九九九年十二月十六日に合格発表が行われた。なお推薦入学制度

は二〇〇一年度入学者選抜においては、歯学および歯科医療を学びたいという意欲が旺盛な受験生を、学業成績に加え、学業以外の活動や社会活動も評価して選抜する、AO（アドミッションオフィス方式）入試選抜へと移行した。

第七節 大学院の充実のために

二〇〇〇年四月から、歯学部も大学院重点化を実施し、新しいシステムで大学院教育を行っている。

歯学研究科では、毎年平均して二、三名程度の入学者はいたが、三二名の定員にははるかに及ばないのが現状であった。また、歯学基礎系への進学者に比して歯学臨床系への進学者が圧倒的に多いのも特徴であった。

そこで、基礎系への進学者の増加を促す目的で、拡大専修制の導入（一九九五年）、入学者の増加を期待して、入学試験の前期・後期制の採用（一九九七年）、大学院重点化と共に学生定員が四二名に増員されたので、社会人入学枠の採用（二〇〇〇年）等々を順次採用し、効果をあげている。

大学院の入学者の中に外国からの留学生の増加が顕著となっている。また、学部と同様に女子学生の進学率の著しい増加も注目すべき点である。

一 拡大専修制の導入

従来、停年退官を控えた教授がその四年前より大学院生の受け入れをやめるということが慣習として行われていた。これは一講座二名として八名の学生が入学しないこととなる。そこで、大学院生の研究指導を臨床系講座の教官と基礎系講座の教授各一名が等分に受け持ち、併せて、一年次は、選択した臨床科目の実習として臨床実習を行

えるように制度を改定した。これによって、前述の停年退官を控えた教授も大学院生を受け入れることが可能となり、同時に、基礎系講座の大学院生も、外来実習を行えるようになった。

二 入学試験の前期・後期制の導入

従来、二月に一回のみ実施していた研究科の入学試験を、一九九七年より、九月にも前期試験として実施を開始した。夏期休暇があるので受験勉強の期間が長いことと、日本育英会の奨学金に早く応募できること、また受験機会が二度になること等の利点があるので、受験者が多くなり効果を上げている。

三 社会人入学制度の導入

二〇〇〇年からの大学院重点化に備え、社会人入学制度を導入した。初年度は定員をほぼ満たす一〇名の入学者があった。本学部はその専門の特性上、入学した社会人はすべて現役の歯科医師である。平日は診療に従事しているので、主として夜間に授業を開講するカリキュラムを編成した。

四 大学院重点化の効果と影響

二〇〇〇年四月より、大学院重点化を実施した。組織上の変更は、従来の基礎系八講座、臨床系一〇講座を、三大講座制に再編した。これは旧講座からの転換による研究分野に、一診療科（歯科麻酔科）ならびに新設分野（高齢者歯科学）を加えて、三九研究分野より構成されている。各大講座は、基礎系研究分野と臨床系研究分野とが混合していることが特徴であり、従来の講座あるいは研究領域の壁を無くし、歯学研究科における研究のより広い展開とより早い伸展を期待して設定された。同時に、大学院の教育カリキュラムを抜本的に改定し、従来の目的であ

る研究者養成と共に、高度専門職業人養成にも対応することを目的とした。

講座の壁をなくし、研究領域の自由な協調、基礎系臨床系の共同による新しい研究領域ないしはグループの形成を期待した組織再編成は、研究分野、大講座の枠組みを意識することのない研究グループが出来ており、今後の発展が期待される。一方、他の研究分野と共同組織を組みにくい分野があることも事実であり、今後の問題である。

重点化の数年前から大学院進学者数が増加した。学生数の大幅な増加と大学院教育の目的の拡大に対応するためのカリキュラムの改善は効果が上がっている。特に、必修科目、選択必修科目の中に研究者としての基礎能力、研究技術を高めるための教育科目を大幅に増やした。また、社会人学生のための夜間開講枠を設けるなど授業実施体制を整え、教育を実施している。開講数が多いため、時間の重複等が問題となることがあり、この点について改善が必要であろう。

第八節 行革の中で

一 定員削減の状況と影響

職員の定員削減は、第一次（一九六九年度）から第九次（二〇〇〇年度）までに、歯学部で三三名、歯学部附属病院で一〇名であり、その内訳は次の通りとなっている。

(一) 歯学部 教官（助手）四名、事務系職員（中央事務一一名、講座関係一八名）計二九名（第九次最終二〇〇〇年度予定を含む）

(二) 病院 看護部二名、事務系職員（中央事務八名）（同右予定を含む）

また、国の政策による合理化により、事務の集中化、一元化が図られ、中央事務で一九九九年度に三名の減があ

り、二〇〇〇年度に一名の減が予定されている。

この状況は、事務系職員に顕著に現れており、現在の定員関係からして事務系職員は、学部、病院併せて四六・六%の減となっている。

定員削減が進むなか、学部および病院の業務は年々、益々広範、複雑化多様化して増加し、反比例の様相を呈しており苦慮している。日々業務を見直し、合理化、効率化を目指しているが、おのずと限界がある。このため業務の一部外注化、また、非常勤職員の採用等を余儀なくされている。

今後、第一〇次定員削減が予定されており、教育、研究、診療の業務に、さらに支障を来すことは容易に想像でき、更なる対応に迫られている。

二 点検評価システムの導入

ほぼ三年ごとに自己点検評価を実施し、実施結果は報告書として公表している。自己点検評価を実施した後、この結果に基づいて、北大の他部局の教官、他歯科大学あるいは他大学歯学部の教員による外部評価を受けている。これらの評価結果は、歯学研究科・歯学部の改善に積極的に利用されている。近年、外部評価に国外の専門家を加えることも多いので、今後導入の方向で検討する必要がある。

第九節 研究の潮流この一〇年

歯学部創設以来、過去三〇年間、口腔科学の発展と歯科医療の展開のために多くの優れた人材を養成し、教育、研究、治療に多大の努力を払ってきた。しかしながら、歯学を取り巻く環境の変化や科学の進歩に伴い、近年の歯

学研究は口腔領域の科学研究や口腔疾患の予防、診断、治療法の開発に止まらず、QOL（生活の質）の向上を目指して硬組織、癌、脳神経系、インプラントなどの分野において、遺伝子工学を利用した分子生物学的、かつ学際的な研究が行われるようになった。その結果、優れた研究成果は日本解剖学会、日本微小循環学会、日本リンパ学会、日本細菌学会、日本組織細胞学会、電子顕微鏡学会、日本生理学、日本神経化学会、日本生化学会、日本病理学会、日本骨代謝学会、日本ビタミン学会、日本炎症学会、日本分子生物学会、国際サイトカイン学会、日本バイオマテリアル学会、日本公衆衛生学会、日本金属学会、日本小児学会、日本癌学会、日本ME学会、日本免疫学会、日本形成外科学会、日本摂食嚥下リハビリテーション学会、日本医学放射線学会、日本ウイルス学会、日本脳神経外科学会、日本麻酔学会、米国化学会、American Association for Cancer Research、New York Academy of Sciences、International Organization for Mycoplasmaology、Society for Neuroscience、Radiological Society of North America など歯学領域以外の国内学会、国際学会でも発表するようになった。このように研究業績は着実に伸び、一九九六年度では著書二六編、総説解説三〇編、原著一二編（和分誌七五編、欧文誌四六編）、国際学会発表六一編となった。そしてこれらの研究業績に対して歯学、医学の分野で多くの学会賞や学会奨励賞が授与された。また科学研究費交付数も二〇〇〇年度は五四件に増加すると共に、スウェーデン、アメリカ、ベルギー、ドイツ、韓国など外国研究者との共同研究も行われ、研究や教育の国際化は急速に進んだ。

（執筆 福田博、校正 小口春久）

年 表

歯 学 部

歯 学 部 附 属 病 院

一九六七(昭42)

4・28 歯学部開設の準備事務が開始された。

5・29 歯学進学課程入学願書受付(～6・3)

6・1 歯学部が設置された。

6・1 歯学部が設置され、歯科保存学第一講座、歯科

補綴学第一講座および口腔外科学講座の三講座が設置さ

れ、学生定員四〇名で発足した。

6・10 歯学進学課程入学試験が行われた(～6・11)。

7・25 歯学進学課程の入学式が挙行された。

8・1

一九六八(昭43)

4・1 歯学部歯学科に口腔解剖学第一講座、口腔生理学講座、口

腔生化学講座および口腔病理学講座の四講座が増設された。

一九六九(昭44)

2・24 歯学部教授会が発足した。

4・1 歯学部歯学科に口腔解剖学第一講座、口腔細菌学講座お

よび歯科理工学講座の三講座が増設された。

歯学部附属病院開設の準備事務が開始された。

歯学部附属病院が設置された。

附属病院入院診療棟一四平方メートル、外来診療棟四五九平方メートルの増築工事が落成した。
附属病院が第一保存科、第一補綴科、口腔外科の三科および病床二〇床で診療が開始された。

北海道内の歯科巡回診療が開始された(一九七四年度まで)。

4・11	第一回歯学部進学式が挙行された（以降毎年四月に挙行）。	
一九七〇（昭45）		
4・1	歯学部歯学科に歯科薬理学講座、予防歯科学講座および歯科矯正学講座の三講座が増設された。	附属病院に予防歯科、矯正科の二科及び病床が四〇床に増設された。
11・30	歯学部基礎臨床研究棟の新築工事が落成した。	附属病院棟六四一〇平方メートルの新築工事が落成した。
一九七二（昭46）		
4・1	歯学部歯学科に歯科保存学第一講座と歯科補綴学第二講座の二講座が増設された。	附属病院に第二保存科、第二補綴科の二科が増設された。
一九七二（昭47）		
12・20	動物実験室の新築工事が落成した。	
一九七三（昭48）		
3・24	第一回歯学部卒業式が挙行された（以降毎年三月に挙行）。	
8・20	アメリカ合衆国オレゴン州立大学歯学部と姉妹校提携の盟約書を交わした。	
一九七四（昭49）		
4・1	大学院歯学研究科が新設された。	
4・11	口腔外科学講座が口腔外科学第一講座となり、口腔外科学第二講座が増設された。	附属病院の口腔外科が第一口腔外科となり、第二口腔外科が増設された。
4・25	第一回大学院歯学研究科入学式が挙行された（以降毎年四月に挙行）。	
一九七五（昭50）		
3・31	歯学部臨床研究棟の増築工事が落成した。	附属病院棟一〇八平方メートル（第一講義室）の増築工事が落成した。
一九七七（昭52）		
4・1	歯学部学生定員が四〇名から八〇名に増員された。	
4・18	歯学部歯学科に歯科放射線学講座が増設された。	

9・17 10・1	歯学部創立一〇周年記念式典が挙行された。	附属病院創立一〇周年記念式典が挙行された。 附属病院に歯科放射線科が増設された。
一九七八(昭53)	第一回大学院歯学研究科修了式が挙行された(以降毎年三月に挙行)。 歯学部歯学科に小児歯科学講座が増設された。	附属病院に小児歯科が増設された。
3・25 4・1 10・1 10・24	文部省歯学視学委員(林・園山委員、随行森事務官)視察	
一九七九(昭54)	歯学部六一一平方メートル(A・B棟)の増築工事が落成した。	
2・15 3・26 4・1		附属病院C棟二〇四平方メートルの増築工事が落成した。 附属病院に特殊歯科治療部が増設された。
一九八二(昭57)	歯学部臨床研究棟の増築工事が落成した。	附属病院特殊歯科治療部棟の増築工事が落成した。
3・24 一九八三(昭58)	オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校提携一〇周年記念式典(ポートルランドの部)が挙行された。 文部省歯学視学委員(総山・田熊委員、随行笹井事務官)視察	
6・14 12・7 一九八四(昭59)	オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校提携一〇周年記念式典(札幌の部)が挙行された。	
6・23 一九八五(昭60)		附属病院職員玄関二九平方メートルの増築工事が落成した。

一九八六（昭61）	歯学部動物飼育室四九平方メートルの増築工事が落成した。	附属病院に歯科麻酔科が増設された。
3・28		
4・1		
一九八七（昭62）	歯学部創立二〇周年記念式典が挙行された。	附属病院創立二〇周年記念式典が挙行された。
9・19		歯科臨床研修医の受け入れを開始した。
一九八八（昭63）	オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校提携一	
6・26		
一九八九（昭64、平1）	五周年記念式典（ポートルランドの部）が挙行された。 歯学部学生定員が八〇名から六〇名に減員となった。	附属病院特殊歯科治療部がJICA（国際協力事業団）の 研修受け入れ先となった。 研修登録医制度を開始した。
4・1		
7・1		
9・20		
一九九〇（平2）	大韓民国全北大学校歯科大学との姉妹校提携の協定書を 交わした。	
11・22		
一九九一（平3）		附属病院特殊歯科治療部に摂食障害治療部門を開設した。
3・1		
一九九三（平5）		附属病院棟改修工事が竣工した。
5・30		
9・1	オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校提携二 〇周年記念式典（札幌の部）が挙行された。	
一九九四（平6）		附属病院特殊歯科治療部に顎変形症治療部門を開設した。
1・1		

10・11	オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校提携二〇周年記念式典（ポートランドの部）が挙行された。	附属病院特殊歯科治療部にインプラント治療部門を開設した。
一九九五（平七）	歯学進学課程・歯学専門課程の区分を廃止し、六年一貫の教育を開始した。 大韓民国全北大学校歯科大学との姉妹校提携五周年記念式典（札幌の部）が挙行され、協定書（更新）を交わした。 文部省歯学視学委員（細田・高添委員、随行山下・山崎事務官）視察	初の点検評価報告書が発表された。
10・12		
11・21		
一九九六（平八）	大韓民国全北大学校歯科大学との姉妹校提携五周年記念式典（全州の部）が挙行された。 高校生対象の歯学部広報誌の発刊開始	
10・28		
一九九七（平九）	歯学部創立三〇周年記念式典が挙行された。	医療情報部の新設 附属病院創立三〇周年記念式典が挙行された。
4・1		
9・13		
一九九八（平十）	大学説明会の開始 外部点検評価が行われた。 外部点検評価が行われた。	高度先進医療の特定 附属病院一診療科が三大診療科に改編 臨床研修医制度の新規スタート
2・1		
4・1		
6・1		
10・26		
11・6		

一九九九（平11）

4・1

地域支援医療部の新設

9・30

オレゴンヘルスサイエンス大学歯学部との姉妹校提携二
五周年記念行事が、同大学の開学一〇〇周年記念行事に
あわせポートランド市で挙行された。

二〇〇〇（平12）

4・1

北海道大学歯学部は大学院重点化され、三大講座（口腔

病態学、口腔機能学、口腔健康科学）となった。

社会人大学院制度の開始

ハルビン医科大学口腔医学院と姉妹校提携の盟約書を交
わした。

6・5

接遇セミナーが開始された。